

---

# きっかけをひろったなら

優芽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きつかけをひろつたなら

### 【Zマーク】

Z5926D

### 【作者名】

優芽

### 【あらすじ】

日和は、消しゴムを拾ってくれた高野君に一目ぼれ。高思いになりました。強願うのだが……？

(前書き)

文章がおかしいです…  
だけど、私なりに一生懸命書きました!  
見てやってください。

「西野？これ……お前の？」

「え？」

私は、西野 西野 田和高校2年だ。

ずっと探していた消しゴムを見つけてくれたのは……。

宮野 宮野 陸衛君でした。

「あ、ありがとうございます。」

私は、軽く頭をさげた。

富野君が教室から出て行った後に……私は、独り言を、ポツンとつぶやいた。

「単純だな。」

私が宮野君を好きになるのに、

そんなに時間はからなかつた。

私は、富野君が好き。

私一人では、うまくいくはずがない。

『……で？何があったの？』

私は、親友のなぎさに電話した。

なぎさは、もう付き合つて半年ほど経つ彼氏がいる。

なぎさによると、他校の人らしいが……。

『えっと…好きな人が……。』

少し恥ずかしくなり、言い出せなかつた。

『ん? 好きな人できたとか?』

『……。』

『図星か。』

電話の奥で、なぎさが笑つていた。

『あはは…』

『相手は? ん? 同じクラス?』

『うん。同じクラスの……み、富野君。』

『……。』

沈黙が続いた。

『まぢ〜！？！？日和、やつと好きな人できたね〜。』

一瞬、沈黙になり私は焦ったが、その後のなきさの明るさに、  
ほつとと思った。

『うん！協力、してくれる？』

『あ、当たり前ぢゃん！』

そこで私は安心し、一端、電話を切った。

早く、明日になれ。

宮野樹、会いたいな。

……………

「あ…………」

私は、電話を切つたあと、寝てしまつたのだ。

「やめッ…………

私は、急いで準備した。

「行つて来まーす！」

宮野君……。

恋つて……不思議かも。

後ろから私の目を、  
覆う。

「なれど…？」

ながせば、一回りとぶいサインをした。

「あッ！」

なぎさは、前方を指差した。

「日和！あそ」！・宮野だよ！」

私の耳元でなぎさは、言った。

「ほ……本当に……。」

私の頬は赤くなつた。

「ほーいー。『おおおー』って言こなよー。」

なぎさは、私の肩を押した。

「ええ！？」

私は、少し困った表情を浮かべた。

話せなこおお、一口が始まった。

「廻野ぐーんー。」

朝つぱらから廻野の周りには、女の子が集まっていた。

廻野は、モテるんだ。

「…………。」

廻野は、かつっこっこ、スポーツも出来る。

モトのは連たつ前だ。

でも、モヤモヤする。

イライラする。

何だろう？この気持ち……。

「ね～？ なぎわ？」

私は、なぎさに寄り添つた。

「ん？」

「あの、富野君の周りに居る女子達を見てると、モヤモヤする。」

L

真剣な私を見て、なぎさは笑つた。

۱۵۰

「なッ！何ー！？何で笑つのよー。」

「あんたさー……そんな事も分からぬの？」

「へ？」

「それはね？嫉妬つてゆんだよ？」

「じつと?」

「好きな人が出来るとね？他の女の子が、自分の好きな人とちょっと話しただけでイライラしちゃうのよ？他の女の子と話されるのは、嫌でしょ？」

「…………嫌だー。」

「ね？話してほしくない。と思つ気持ち……大切だと思つなー。」

私がしている事は……嫉妬とゆーもの。

恋してゐる人しか味わえない……嫉妬？

「私！大人になつた！？」

ぽかんとしたなぎさは、笑いをこらえなくなつたのか……

「あはははははははーなつたなつた！」

「そー！そんなに笑わなくともいいぢゃん！」

7月5日

私は、一つ、なぎさから大切な事を学んだ。

「サッカー部つて大変ですか？」

朝、私は鏡に向かつて独り言を言つていた。

「サッカー部つて大変ですか？」

大きく私は、深呼吸した。

「大丈夫。富野君に話しかけるんだ！」

そう。

さつきの独り言は、富野君に言つ言葉を練習していた。

「落ち着け日和！」

玄関を開けて、外に足を踏み入れた。

恋は、自然と幸せになれる。

すごいパワーだ！！

すると、前方にはフェンスに腰かけているなぎさがいた。

「あーなーぎさーーー」私は、なぎさ曰がけて、手を振った。

「あーやつと来た！」

「ん？」

なぎやは、フェンスの先を指さした。

「あそこ見てみ？」

私は、なぎやに従つてフェンスを見た。

「あーーー！」

私は、声をあげた。

なんとーーそこには、富野君であった！

「何してるの？あれ。」

「今からサッカーの試合があるんだよ。」

「こんな時間からーー？」

私の時計は、7：15を示していた。

「富野君、時々学校を出るからね~」

「えー? わーなの?」

私はびっくりした。

「うふ。あれ、部活での試合じゃないんだよ。」

「それぢやあ、あのチームは?」

ななななな、田を細めた。

「あれは……お誘いぢやない?」

「お誘い?」

「富野君、すば抜けでサッカーつまいから、他の高校からお誘いがくねんだよ。」

私の知らない富野君……。

何でなあせそんに知つてこるの？

もしかして……。

なんて

なあせには彼氏がいる、他校だとも聞つたし。

「あ～それにしてもカッコいいな～」

「お～い？学校始まるナビ？ど～すんの？」

なぞなぞは、私の顔を覗き込んだ。

「えへ？ まだ見ていたいよ～。」

「…………。学校でもある～？」

なぞなぞから思わず発言が！

「なぞなぞってそんなに悪かったっけ？」

「あら、なぞなぞはまっふべを殴りませた。

「私、学校行くからね～？」

「えへ？」

チラッと私は、後ろを見て……。

なぎわと一緒に学校へ向かつた。

「ね～～なぎわ～～今日、西野君、学校来ると思ひ～～」

「あ～～？ 来ないんぢやない？」

なぎわは、少し意地悪な笑顔で、いついついた。

「来ないのかな～？」

私は一気に沈んだ

「もう～～マイナス思考やめなつて！ 日和の悪い癖だよ？」

「だつて…なきなが來なつて言つたんぢやん。」

ゆるとい、なきなは

「絶対来るよ…ひへ、言つて返しなきによ」

と、また意地悪な笑顔で言つた。

なきながの言ひとおつかもしれない。

「よしー」れからば、プラス思考で頑張るぞー。」

「あんまつプラス思考になつても困るけどね~笑」

なきながと恋話をしながら学校に行くのは、楽しかった。

4時間目

教室のドアがいきおいよく開いた。

皆の視線が、ドアにいく。

私は、『もしかしたら』と思つた。

が。

違つた。

隣のクラスの先生だつた。

「東先生！大変です！」

何か事件でもあつたのか……？

「富野が！富野が！他校と喧嘩を…」

ざわッ

…

私は、目を大きくあけた。

「み……富野君が？」

私は、ボソッと呟いた。

皆がパニック状態のところだ。

先生が「静かにしなさい！」と何回も言っている。

足が勝手に動いた。

学校の階段を降りて、靴箱を通り過ぎた。

あのフェンスへ行けば……何か分かるはずだ！！

そのフェンスへ行くと……。

宮野君が水道で顔を洗っていた。

「み……宮野君？」

私は、横から思い切って話しかけた！

「あ？」

怖い目で富野君は、私を見た。

「えつと……喧嘩したって聞いたから……大丈夫かな……って。」

すると、富野君の動きが止まつた。

「で？」

「へ？」

富野君は、鋭い目で、私を見た。

「お前には関係ないだろー？ 一いちいち首突つ込むなー！」

富野君の声が、グランド中に響き渡つた。

「あ、その……」

私の目から涙が出てきた。

それに気づいた富野君は、焦っていた。

「な……なんで泣くんだよ?」

富野君が、困った顔で私を覗き込む。

「び……びっくりした……。」

私は、手で顔を覆った。

「……。」

沈黙。

沈黙をやぶったのは、富野君だ。

「……悪かったよ。」

ん！？今……。

「（）めん。あの、言わないでほしかただけ……」

宮野君は、照れた。

「え？ 何？」

私は、宮野君を急かした。

「他校の奴と喧嘩した理由なんだけど……」

この時、私は心臓が止まるくらいのショックを受けてしまった。

「彼女のためにやつたんだ。」

「え？」

私の目は、もはや死んだ魚のようだ。

「俺の彼女、他校にいるんだけど……その彼女が

「もひこじょ。

私は、宮野君の話を最後まで聞かなかつた。

「は？ なんだよそれ。お前が泣くから話してやつたのに。」

何で泣いたか分からぬの？

好きだからだよ？

宮野君の事好きぢやなかつたら……泣いてなんかない。

「むづここよ。」

宮野君は、頭をかいだ。

「彼女…………いたんだ？」

私は、自分が傷つくるのが分かつていながら、宮野君に質問した。

「……。それは、皮肉か？」

「そんなんぢやないよ。」

「あ、学校戻らないと。」

私は走つた。

息がきれるくらい走つた。

「ば……馬鹿。」

私は、ある公園のベンチに腰をおろした。

頬に涙がつたる。

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿……。」

しづりベベンチに居て、制服のポケットから鏡を出した。

「あはは……こんな顔ばらやあ学校戻れないね。」

私は、独り言をポツリと呟いた。

「ムカツクよ～…本當に…」

顔を上げ、空を見た。

「めつちりや綺麗ぢやんか～。」

涙目で私は、無理に笑った。

神様？

私は、幸せにはなれないのですか？

それから、どのくらいの時間が経つただひつ……。

「西野……」

誰かが私を呼んだ。

「ん……。」

「西野？」

そこに居たのは、西野君だった。

「何で西野君がここに居るの？」

私は、ムクッとベンチから立ち上がった。

辺りを見回すと、もう真っ暗だった。

「えー？ 今、何時！？」

私は、時計を見た。

8：23 と、時計には書いてある。

西野君だと確認すると、さつきの事で胸が締め付けられた。

走って家へ向かおうとした瞬間……。

『パシッ！』

宮野君は、私の腕をつかんだ。

「何？離してよ。」

私は、勢いよく手を振り払った。

が。

面野君の腕は、ビクともしない……。

「まだ、帰らせるわけにはいかない。」

(は？何言つてゐの？)

「何で？」

「何が？」

「何で、さつき泣いたの？」

「なぜとなのか……？」

「私に好きと叫ばせる気なのか？」

「別に……。目が痛かったの。」

「苦しい言こと訳だ。」

「俺の事、嫌い？」

「さあ？」

もしかして……気づいてる？

「あ～もお～……」

富野君は、頭をかいた。

「分かった！…本当に本当にあの事…」

（何？また彼女の話？）

「ノロケなんか、私、聞かないから。」

私は、やつぱり富野君に背を向けた。

「その事なんだけど……彼女つひのことは……」

「嘘なんだ！！」

(ん……?)

「はあ～！？！？！？！？」

「うめん。カッ口つけたくて……。」

「あのね～！そっちの方がよっぽどカッ口悪いよ？」

私は、こんな口調だが……

内心、すうじく安心してゐる。

「神様は、居るのかも。」私は、宮野君に聞こえないぐらう小さな

声で言った。

「じゃあ、何で、喧嘩を？」

「…………。カッ「悪いんだけどよ～。」

そう言いながら田線を落とした。

「サッカーの試合の時、仲間が怪我させられてよ？そんで頭にきて……つい。」

「何でそこから、彼女の話になつたの？」

「友達が、相手のサッカーチームのリーダーの彼女とつたんだ。そんで、相手が怒つてから、友達殴られて、俺が、カつとなつて……。」

「…………。」

「彼女って、宮野君の話ばかりなくて、お友達の事だったの…？」

「そー……なるかな。」

私は、拍子抜けした。

それから今まで落ち込んでいた自分が恥ずかしい。

「宮野君、国語の成績、悪いでしょ？特に説明文のところ。

「は～！？何だよそれ！？」

宮野君は、顔真っ赤だ。

全く

神様は、私に宮野君を諦めるな！と言っているのか……。

「さて！帰るかー！！」

私は、大きく背伸びした。

「じょうがねーから、俺様が送つてやるよ」

「誰も頼んでないけどね」

「はあああ！？」

今日の朝の臆病な私は、どこいった？

面野君と話すなんてあつえない事だったの……。

今いじじは、私と面野君が話してる……。

並んでる……。

「もう充分です……」

「こきなり何だよ……？」

「なんでもない……」

私は、意地悪な笑顔で言った。

私は変わったんだ

涙が出てくる……。

よく頑張ったね？

もう笑って？

「ん？ お前、泣いてない？」

「ば・・・力！」

「何が！？」

好き好き好き。

絶対にとられない。

私がもううつてやる。

そう、田和は、決心し……

夜の公園通りを、畠野君と歩いていった。

(後書き)

初めてなので、多々おかしい所もあると思います。  
どうか、感想など書いてくれると、次からもまた頑張れますので!  
よろしくお願ひします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5926d/>

---

きっかけをひろったなら

2010年11月5日07時28分発行